



日野市立日野第四小学校

校長 三浦 寛朗

令和6年10月号

学校 Web ページ

<https://www.hino-ky.ed.jp/e-hino4/>



学校標語 「夢中になれる 夢中にさせる 日野四小」

## 学びを楽しむ探究の秋

校長 三浦 寛朗

9月の猛暑もやっと落ち着き、秋空が気持ちよく澄みわたる季節となりました。食卓には秋の味覚が並び、風のさわやかさは本格的な秋の訪れを感じさせてくれます。暑さ指数が高くて校庭での活動ができなかった子供たちも、久しぶりに涼しい校庭で、元気いっぱい体を動かしています。

みなさんは「〇〇の秋」というと何を思い浮かべますか。先日、あるニュースサイトを見ていると「〇〇の秋といえど」というランキングが発表されていて、「芸術の秋」「スポーツの秋」など様々な〇〇を抑えて、「食欲の秋」が第1位でした。秋はブドウや梨といった旬の果物や新米など、おいしいものが目に付く季節ですので、食欲の秋が第1位というのも納得でした。そんなランキングを見ながら、ふと気になったことがありました。「なぜ秋だけに〇〇の秋というものがあるのだろう？」と。そこで、語源やいつごろから「〇〇の秋」と言われるようになったのか調べてみました。

様々なサイトに諸説ありますとの前提で書かれていたことは「秋は気候がいいから」ということでした。確かに、暑すぎず寒すぎず何をするにしてもちょうどよい季節ではありますね。もう少し調べていくと、「読書の秋」について詳しく書かれていました。

「読書の秋」という言葉は、8世紀頃、唐王朝の時代に活躍した中国の韓愈（かんゆ）という詩人が、自著「符読書城南詩」のなかに記した「時秋積雨霽 新涼入郊墟 燈火稍可親 簡編可卷舒」（秋になって長雨が終わって空も晴れ、涼しさが丘陵にもきている。ようやく夜の灯に親しんで、書物を広げられる）という詩に由来するといわれています。この詩を明治の文豪夏目漱石が1908年に発表した小説『三四郎』のなかで引用したことで、秋は読書をするイメージが一気に日本中に広まり、「読書の秋」という言葉が定着した、という説が有力だそうです。さらに、1947年には「読書の手で平和を築く」ことをテーマに、書店や図書館が中心となった「読書週間」が10月27日から11月7日にかけて開始されました。現在も続くこの週間は、1960年に公団社団法人「読書推進運動協議会」が設立され、推進したことで全国にも広まりました。この読書週間は「読書の秋」のイメージをより定着させたともいわれています。

さて、四小の秋といえば「探究の秋」です。10月は1日（火）と31日（木）の2日間、マイプランスクールが行われます。5月から始まったマイプランスクールもこの10月で5・6回目です。これまで子供たち一人一人が自分で決めた「テーマ」「問い」の解決に向けて、探究的な活動を行ってきました。なかには、自分の「問い」を決められず苦労した子もいます。活動を進めていくうちに、新しいことに興味が湧いてきて「問い」が変わった子もいます。自分の計画したような活動が思うように勧められず苦労した子もいます。しかし、どの子も途中で投げ出すことなく自分の学びを深めてきました。そして、私たち教員も、子供たち一人一人のやりたいをかなえるために、伴走してきました。特に大切にしてきたことは、子供たちがマイプランスクールを楽しむこと、自分で学ぶことを楽しむことです。

古代中国の思想家、孔子と弟子たちとの問答を収録した書「論語」には、次のような言葉が書かれています。

『子曰、知之者不如好之者、好之者不如樂之者』（子曰く、これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず）

「あることを理解している人は知識があるけれど、そのことを好きな人にはかなわない。あることを好きな人は、それを楽しんでいる人に及ばないものである」という意味です。つまり、何事もそれを楽しみに感じている人が一番だというわけです。

11月2日（土）にはアウトプットデイもあります。子供たちが自分の好きから決めたテーマ・問いについて、楽しみながら学んできたことを、自分の言葉で発表します。保護者の皆様、地域の皆様のたくさんの参観をお待ちしております。子供たちの発表を、ぜひ一緒に楽しんでください。どうぞよろしくお願いいたします。